銭形平次捕物控

巾着切の娘

野村胡堂

青空文庫

一

「あツ危ねえ」

錢形の平次は辛くも間に合ひました。夜櫻見物の歸りも絶えた、兩國橋の中ほど、若い二人の袂を取つて引戻したのは、本當に精一杯の仕事だつたのです。

「どうぞお見逃しを願ひます」

「どつこい待ちな、――そんな身投げの極り文句なんか、素直に聞いちや居られねえ」

「死ななきやならないわけがございます。どうぞ、親分」

爭ふ二人、平次は叩きのめすやうに、橋の欄干に押付けました。

「頼むから靜かにしてくれ。俺は横山町から驅け付けたんだ。息が切れて叶はねえ、――意見をするのが面倒臭くなると、二人を縛つて欄干に晒し物にする氣になるかも知れないぜ」

「親分さん」

「解つたよ。三百八十兩の大金を巾着切にやられて、主人への申譯、言ひ交した女と一緒に、ドブンとやらかさうといふ筋だらう」

「えツ」

「お前は、増屋の養子徳之助、――此方はお富といふんだつてね」

「さう言ふ親分さんは？」

「神田の平次だ」

「あツ、錢形の――」

徳之助とお富は、死ぬ筈の身を忘れて、町の家並に傾く櫻月の薄明りの中に、江戸第一番の御用聞と言はれた平次の顔を見直しました。

「横山町の店からの使ひで飛んで行つて見ると、――一度店へ歸つたお前が、お富と牒し合せて飛出したといふ騒ぎの眞つ最中だ。いづれは心中ものだらうと思つたが、永代へ行つたか兩國へ行つたか、それとも向島へ遠走りをしたか見當がつかねえ、――兎も角、近間の兩國へ驅け付けて、幸ひ間に合つたからいゝやうなものの、これが永代へでも伸された日にや、今頃は三途の川で夜櫻を眺めて居るぜ、危ねえ話だ」

さう言ふ平次の言葉を聞いて、

「――」

二人はゾツと襟をかき合せました。助けられた今になつて見ると、三途の川の夜櫻が、あまり氣味のいゝものではなかつたのです。

「さア行かうぜ。――店ぢや皆さんも大心配だ。わけても増屋の旦那は、三百八十兩のことも忘れて、徳之助に若しもの事がなけりやいゝが――と居たり起つたり、神棚に燈明をあげたり、見るも氣の毒な程の氣の揉みやうだ」

「申譯もございません、――でも、私は此儘店へ歸つては濟まないことがございます」

「はてネ」

月明りの僅かに殘る欄干に凭れたまゝ、徳之助は苦悶に打ちひしがれて、濡れでもしたやうに、しよんぼりと語り續けました。

十三の年、親を喪つた徳之助は、遠縁の増屋に引取られて、養子分で二十一まで働きましたが、増屋の主人三右衛門の慈愛が深まるにつれて、朋輩の嫉妬が激しく、三百八十兩の大金を失つても、主人の三右衛門は許してくれるでせうが、番頭手代は、決して腹の中

では、許してくれないだらうと――かう言ふのです。

その上、今日まで内證にして居た、お富との仲が、この心中騒ぎで一ぺんに知れたら、他の奉公人の手前、主人の三右衛門も、素直に許してはくれないかも解らず、いづれにしても、二人揃つて増屋の敷居を跨ぐのは、どうも遠慮しなければならないやうに思はれる、と言ふのでした。

「それは一應尤もだが、金は働いて返す折もあるだらうし、二人の仲は、いづれは知れずに濟まねえだらう。店へ歸つて、大恩ある主人に安心させるのが、何よりの孝行といふものではないか」

平次は口を酢つぱくして説き勸めますが、若くて一徹な二人は、心中の仕損ひの顔を、ノメノメと元の店へは持つて行く氣になりさうもありません。

「それでは、私のお父さんは、直ぐ其處の濱町に居ります。行つて相談して見ませうか」

お富はかう言ふのです。漸く十九になつたばかり、増屋の奉公人には相違ありませんが、女隱居の相手をしてゐる可愛らしくも清らかな娘で、徳之助と並べると、歌舞伎芝居の道行を見るやうな、一種の情緒を醸し出さずには居ません。

死出の晴着のつもりでせう。薄化粧に、一帳羅らしい銘仙を着て、赤い帶も、黒い髪も、水へも火へも飛込みさうな、純情無垢の象徴に見えて、平次の目には危つかしくてならないのでした。

「それはいゝが、店では心配してゐるだらう」

平次はまだ、増屋の大騒ぎが目に見えるやうな氣がするのです。

「親分――横山町へは、あつしが一と走り行つて來ますよ。二人を濱町へ連れて行つちや何うでせう」

月の隈の中から、長い〳〵影法師を曳いて現れたのは、錢形平次の子分、ガラツ八の八五郎の忠實な姿でした。

二

「お父さん」

「――」

「開けて下さいな、お父さん」

「誰だい」

「私よ、お父さん」

お富はそつと入口の戸の隙間に顔を當てました。

「何處の狐が化けて來やがつたんだ、畜生」

たまり兼ねて起出した様子、――火打鐵の音や、荒々しい足音にも、憤々たる怒りはよく判ります。プーンと匂ふ、硫黄附木の匂ひ。

「そんな事を言はないで、お父さん」

お富はやるせない様子でした。幾度も〳〵――徳之助がそのまゝ逃げ出しでもするのを惧れるやうに、――振返つて後ろを見るのです。

「お店から先刻番頭さんが來て、手前の不心得は皆んな聞いてしまつたぞ、馬鹿野郎。死ぬなら勝手に死ぬがいゝ、親にまで恥を掻かしやがつて」

さう言ひ乍らも、内からガラリと戸を開けました。灯を背負つた五十年配の屈強な親仁、左官の彦兵衛といへば、仕事のうまいよりは、頑固一徹なので界隈に知られた顔です。

「お父さん、さういはずに、相談に乘つて上げて下さい、――私達

は本當に死ぬつもりだつたのを親分さんに助けられて——かうしてお父さんのところへ歸つて來たんです」

お富はさう言つて、後ろに立つた德之助と、それから、錢形の平次を見やりました。

「——」

娘の沈んだ聲も、打萎れた樣子も、彦兵衞の怒りを宥める由はなかつたでせう。

「お父さん」

「主人の養子をそゝのかして、三百八十兩の大金を持出させるやうな、そんな娘を俺は持つた覺えはねえ」

「お父さん、それは、違ひますよ。三百八十兩は巾着切に取られ——」

「默らないか。本所で巳刻前に受取つた金を、わざ〳〵花時の向島へ持込んで、巾着切に取られる奴があるものか、——その上お店へ歸つたのは、薄暗くなつてからだつて言ふぢやないか」

「お父さん」

「さア歸つてくれ。俺まで泥棒の仲間にされちや、賣り込んだ顏に關はる、——繩を附けて突き出さないのが、せめては親の慈悲だ」

彦兵衞は言ふだけのことを言ふと、娘と德之助を曉闇の中に殘したまゝ、沒義道に戸をピシリと——

が、その戸は半分閉めかけたまゝ、錢形平次に押へられました。

「何をしやがるんだ」

彦兵衞は少し中ツ腹でした。

「彦兵衞、俺を忘れはしまいな」

「——」

「平次だ、——久振りだつたな」

「あツ、錢形の親分」

僅かに殘る月光りに透して、左官の彦兵衞は仰天しました。

曾ては淺草で左官をして居た彦兵衞、飮む、打つの道樂が嵩じて、一時は巾着切の仲間にまで身を落しましたが、今から五年前、別れてゐた女房の末期の諫めに、飜然として本心に立ち還り、娘のお富を引取つて、神田で堅人に生れ變つた經緯——平次は何も彼も知つて居たのです。

お富は美しく清らかに生ひ立ちました。親父に巾着切の古疵があるとも知らぬ清純さ、それを見るのを唯一の樂しみに、彦兵衞は本當に眞つ黒になつて働き續けたのです。

嫁入前の一と修業のつもりで、增屋の女隱居附に奉公させたのは一年前。それは娘を仕込む術を知らない、男親の淋しさでしたが、彦兵衞はそれも辛抱して、何の邪念もなく、勤め上げて歸つて來るお富を待つて居たのでした。

それが、お店の養子と勝手な事をして、三百八十兩の大金を持逃げしたと番頭に聞かされ、罪の遺傳の恐ろしさに、彦兵衞は打ちひしがれ乍ら、寢もやらず待つてゐると、顏見知りの錢形の平次に送られて、怪我もなく立ち戻つて來たのです。

飛び付いて引摺り込んで、二つ三つ橫つ面を張り飛ばして、それから犇と抱きしめて、泣けるだけ泣いてやりたいやうな心持を我慢して、彦兵衞は沒義道に戸を閉めたのに、何の不自然があるでせう。平次が止めてくれなければ、お富が泣き濡れて、父親の胸に噛り付くに定つて居るやうに思へたのです。

「ぢや、あの、娘を助けて下すつたのは？」

彦兵衛の照れ臭さ。

「俺だよ、彦兵衛」

「――」

「濱町で堅氣に暮してゐるとは聞いたが、お富の親がお前とは知らなかつた、――それにしても、五年前の彦兵衛とは、打つて變つた心持、この平次もすつかり感心してしまつたよ」

平次は灯の中に全身を現すと、斯う心から老巾着切の心境を褒めるのでした。

「恐れ入ります、親分」

「それにつけても、お前の考への間違つてゐることだけは言はなきやなるまい。番頭は何と言つたか知らないが、三百八十兩の金は、たしかに巾着切にやられたに違ひない。二人の樣子で、この平次は潔白を見屆けたよ」

「ヘエ――」

「兩國橋から飛込まうとするのを、どんなに骨を折つて止めたか――捕繩を出して、欄干へ縛らうかと思つた位だ。人間は、見榮や洒落で、夜中過ぎの大川へ、女づれで飛込めるものぢやねえ」

「――」

「増屋の主人は、德之助の正直をよく見抜いていらつしやる。奉公人達には嫉みもひがみもあるだらうが、主人の信用さへ變らなきや、少しも驚くことはない――」

「ヘエ――」

彦兵衛はポロポロと涙をこぼして居りました。錢形平次が保證してくれゝば、もう大手を振つて江戸中を歩ける二人です。

「お富との仲が一ぺんに知れ渡つて、此儘では横山町の店へ歸りにくいといふだけの話さ。お前もよく若い二人に言ひ聞かせてくれ、――さア入つた〳〵、父つあんは苦勞人だ、よく解つてくれるよ」

平次は兩方へさう言ひ乍ら、有明月の隈に小さくなつて居る二人を招きました。

三

貧しい灯の下に、二人を押し並べて、平次と彦兵衛は、死ぬ氣になつた無分別を叱つたり宥めたりしました。

「三百八十兩は大金だが、増屋の主人は締らめてゐるし、奉公人並といつても、養子のお前だ。一生眞面目に働いて、身上を肥らせる氣になれば、三百八十兩は安い資本のやうなものぢやないか」

平次はさう言つてやります。

「金せえありや、俺の手で何とでもするが、こんな暮しをして居ちや、三百八十兩は愚か、三兩二分も覺束ねえ」

彦兵衛は口惜しがるのです。惡事に榮えた昔の事を思ひ出したのでせう。

「正直者はそれが本當さ、――ところで、どんな野郎が拔いたんだ。三百八十兩が懷中から消えた後前のことを、少し詳しく聞かして貰はうか」

と平次。

「相生町のお華客で、三百八十兩、小判で受取つたのは巳刻少しまへでした。眞つ直ぐに兩國へかゝると、橋の袂で何處かの小僧さんが待つて居て、『増屋の主人が小梅の寮に居るから、其方へ持つて行くやうに』といふ傳言です」

「フーム」

「別に疑ふ心持もなく、向島へ行くと、丁度花は眞つ盛り、晝前だといふのに、土堤は、こぼれさうな人出です。その間を縫ふやうに、言問の近くまで——實は飛んだ儲けもののつもりで、花を眺め乍ら行くと、いきなり突き當つて喧嘩を吹つ掛けたものがあります」

「どんな野郎だい」

彦兵衞は横合から口を出しました。

「小鬢の禿げ上がつた、薄あばたの男で」

「フーム」

「二つ三つ毆られて、土堤の下へ轉がされると、——それ喧嘩だツ——といふ人だかり」

「——」

「漸くハネ退けて飛起きると、相手は人混みの中に飛込んで何處へ逃げたかわかりません。ハツと氣が付いて懷中を見ると、三百八十兩の小判を入れた財布は、紐を切られて拔かれてしまつたのです」

「あの野郎、やりやがつたな」

彦兵衞は思當ることがあるらしく、拳固で鼻の頭を撫で上げ乍ら、詰め寄りました。

「びつくりして、氣違ひのやうに驅け廻りましたが、相手は何處へ逃げたか、影も形もありません。小梅の寮へ行つて見ると、旦那が此處へ來てゐるといふのは眞つ赤な嘘、よく〳〵企まれたと氣が付くと私はもう、死んでお詫びをするより外に思案もなくなりました」

「——」

「日の暮れるまで死場所を探して、彼方此方歩きまはりましたが、何處へ行つても花見客で一パイ、日が暮れると足は横山町の方へ向いて居りました。お富に逢つて一と言、別れの言葉が言ひたかつたのです」

德之助の肩はガクリと落ちて、鬢のほつれも、白い頬も、あはれ深い姿です。

「一緒に死なうと言ひましたのは、この私でした。お父さん、堪忍して下さい。——お父さん一人殘して死ぬと思ふと、胸が張り裂けるやうでした。でも、德之助さん一人殺して、私は生きてゐる氣がしません」

後ろからお富、伸した手はそつと、父親の膝小僧へ——

「ば、馬鹿なツ。親父をつかまへて、惚氣を聞かせる奴もねえものだ、ヘツ、ヘツ」

彦兵衞ははふり落ちる涙を、横なぐりに拂つて、歪んだ笑ひを絞り出して居ります。

「ところで、彦兵衞。その巾着切の薄菊石を、お前は心當りがありさうだが——」

平次は職業意識を取戻しました。

「それですよ、親分。若い者には聞かせたくねえ話で、——ちよいとお顔を」

彦兵衞は目顏に物を言はせて、滑るやうに明けかゝつた街へ出ました。

それを追つて平次。二人は暫らく無言のまゝ、濱町河岸に立つて、銀鼠から桃色に明けて行く大川端の春を眺めて居ります。

「彦兵衞——薄菊石の巾着切は誰だ。早い方がいゝ。今から手を廻したら、金が戻るかも知れねえ」

平次は口を切りました。

「描き菊石の東作といふ野郎で、――仕事をする時だけ、自分の顔へ繪の具で菊石を描くほどの用心深い奴ですよ」

「何處に居る、少しでも早い方がいゝ」

「ね、親分さん、――これはあつしに任せて下さいませんか」

「――」

「十手捕繩ぢや――そんな事を言つちや惡いが、後口のよくねえことがあります。彦兵衞が一世一代、身體を張つてきつと型をつけます。こいつはあつしに任しておくんなさいまし」

彦兵衞は思ひ切つて斯う言ふのです。

「それはまた、どうしたわけだ」

と平次。

「增屋の嫁にならうといふ娘の耳に、あつしの素姓を知らせたくはありません。――それにあの東作の仕事振りを、あつしはよく知つて居ります。これは企みに企んだ上のことで、金を隱して、描き菊石を洗つて居た日には、親分が踏込みなすつても、どうすることも出來ません」

「その時は手前が活證人になつてくれるだらう。なア、彦兵衞」

「なれと仰しやればなりますが、その代りあつしの素姓は明るみに曝されて、娘は死ぬほど焦れても、增屋の嫁になれつこはありません――相對死を助けて貰つても、一人死をさせちや、反つて不憫ぢやございませんか、親分」

「――」

「三百八十兩の金を取り戻し、德之助とお富を無事に增屋に歸した上で、菊石の東作を縛るなり叩くなり、勝手になすつておくんなさい。ね、親分――錢形の親分さんを見込んで、この彦兵衞が一生一度のお願ひでございます」

何時の間にやら彦兵衞は、朝の大地の上に崩折れて、錢形平次を拜んでゐたのです。

「よし、判つた。たつた三日、日眼を切つて待つてやらう。手前の改心を見屆けた平次があの可愛らしい娘への土産代りだ」

「有難うございます、親分」

「いゝよ、俺は拜まれるのはあんまり好きぢやねえ――大變な泥だぜ、仕樣がねえなア」

平次は彦兵衞を起してやつて、その胸から膝へ一面に附いた土埃を拂つてやりました。

もう出始めた街の人達、醉つ拂ひの介抱とでも思つたのか、それを遠卷に見て居るのでした。

四

田原町の經師屋東作、四十年輩の氣のきいた男ですが、これが描き菊石の東作といはれた、稀代の兇賊と知る者は滅多にありません。

その奥の、思ひの外贅を盡した一と間に、主人の東作と、左官の彦兵衞は相對しました。

「久し振りだね、彦兄イ。眼と鼻の間に住んでゐても、稼業が違ふと、斯うも逢はないものか」

東作は澁い茶一杯掩れるでもない冷たい態度で、少し茶かし加減にかう言ふのでした。

「お蔭で地道な貧乏暮しも四年と續いたが――今日はね東作、少しお願ひがあつて來たんだが」

彦兵衞は居心地が惡さうにモヂモヂし乍ら、思ひ切つた樣子で切出しました。

「ハテネ、堅氣のお前さんからの賴み、といふと、袋戸棚の唐紙でも貼つて貰ひたいと言ふのかい」

東作は煙草盆を引寄せて一服吸付け、長閑な煙を長々と吐きました。プーンと高貴な、國府の薰り——。

「外ぢやねえ。昨日向島で拔いた、增屋の息子の三百八十兩」

「何を言ふんだい、彦兄イ。向島だの、三百八十兩だのと——俺はもう惡事とは緣切りさ。三年前から堅氣になつて、近頃では左官の彦兵衞と同じやうに通用する經師屋の東作だ。可怪な事を言つて貰ひたくないね」

「さうでもあらうが東作、——俺が聞いた手口は、昔のまゝの描き菊石だ。あの三百八十兩を拔かれたばかりに、昨夜は兩國橋から、危なく若い二人、身を投げるところよ」

「一人は彦兄イの——娘お富さんとか言つたね」

「それまで知つてゐるなら、言ふだけ野暮だ。なア、東作、昔の誼。その三百八十兩を、この彦兵衞の顏に免じて返してくれ、きつと恩に被る——」

「それぢや彦兄イ、本氣でそんな事を言ひに來たのか」

「本氣も、本氣この通りだ。娘の命にも關はること、愚に返つた彦兵衞が一生の賴みだ。聞いてくれ、東作」

彦兵衞は兩手を疊に下ろして、涙ぐんでさへ居たのです。

「やい、彦兄イ」

「——」

「いやさ彦兵衞。年のせゐかは知らねえが、大層手前はボヤケやがつたな」

東作は銀煙管を逆手構に、火鉢を小楯に取つて屹となりました。

「東作、賴む」

「東作々々、と、安くして貰ひたくねえ。昔は惡黨仲間の兄イ分だらうが、——稼いだ金をそつくり返せといふのは、こちとらにはねえ仁義だ。巫山戲た事を言やがると、彦兵衞だらうが朴念仁だらうが、勘辨しねえぞ」

「解つたよ、東作。手前の腹を立てるのも無理はねえが、——俺の方にも少しばかり言ひてえことがある」

「——」

「娘の命を助けたのは、他ぢやねえ、錢形の平次親分だ。三百八十兩拔いたのは、描き菊石の東作と話すと——」

「何?」

「まア、待つてくれ。俺は一生懸命平次親分を宥めて、三百八十兩は、見事この彦兵衞が貰つて來るからと、漸く引取つて貰つたのは、ツイ先刻だ」

「それぢや、手前、錢形の平次に、この俺の事までベラベラと饒舌つてしまつたのか」

東作はカンカンに腹を立て乍らも、襟元の薄寒さを感じました。錢形平次に睨まれることは、惡黨仲間に取つても致命的な恐怖です。

「娘の命を助けたさの行きがかりだ——それは仕方があるものか。三百八十兩の金を返してくれさへすれば、平次親分に賴んで、今度のことは眼をつぶつて貰ふ工夫もあるだらう。なア、東作」

「御免蒙らう」

「何?」

「岡つ引に脅かされて獲物を吐き出したとあつちや、この東作の名折れだ。今直ぐ長い草鞋を穿くまでも、そいつは御免蒙らうよ」

「どうあつてもか、東作」

「いやに東作、東作つて言やがるぢやないか。誰が何と言つても嫌だよ。判つたかい、彦兵衛」

「野郎ツ」

二人は睨み合ひました。爭闘を始める一瞬前の猛獣のやうに――。

「ハツハツハツハツハツ、年は取つても、娑婆つ氣は拔けねえぜ。飛んだいゝ氣合だよ、彦兄イ」

急に笑ひ出した東作の顏を、彦兵衛は眉も動かさずに睨み据ゑます。

「三百八十兩、事と次第によつては、隨分返してやらないものではないが、その代り、禮はするだらうな、彦兄イ」

「禮？――それはするとも、その日暮しの左官には、どうせろくな禮も出來ないが」

彦兵衛は緊張が緩んで、思はず肩を落しました。相手の樣子に妥協的なものを讀んだのです。

「禮と言つたところで、錢や金ぢやねえ」

「――」

「俺には少し望みがあるんだ。――外ぢやねえ、三百八十兩返しや、徳之助も無事に增屋に納まるだらう。お富とはどうせない緣と二人を諦めさせて、お富をこの東作の女房にくれる氣はないか」

「な、何だと」

東作は大變なことを言ひ出しました。

「それが嫌なら、增屋へ乘込んで、手前の素姓を皆んなバラしてやるまでよ。江戸で指折の大店が、巾着切の娘を嫁にするかしないか。こいつは面白いぜ、なア彦兄イ」

「手前それは正氣で言ふのか、東作」

「正氣も正氣、この通り、醉つても寢ぼけても居るわけぢやねえ。年は少し違ふが、まだ厄前の東作に、十九のお富が不釣合とは言はさねえ。巾着切の娘が巾着切の女房、こんな似合ひの緣があるものか」

「野郎ツ」

「まア、怒るな、彦兄イ。俺は二三年前から、お富坊に眼をつけて居たんだ、――この緣談さへ承知なら三百八十兩は結納代り、熨斗をつけて差上げるよ」

「――」

東作の太々しさと、その企みの深さに壓倒されて、彦兵衛は燃ゆる眼に宙を見たまゝ、血の出るほど唇を噛みました。

濱町の家では、お富と徳之助が、平次に言ひ宥められ乍ら、事情を知らない乍らも、何やら吉報らしいものを待つてゐることでせう。

五

お富を一人殘して、徳之助だけ店へ歸すのは、彦兵衛の方では不可能なことでした。

死の一歩手前まで行つた二人は、恥も外聞も、義理も體面も捨てて、もう一瞬も側を離れようとはしなかつたのです。

幸ひ、增屋の主人三右衛門からの傳言で、二人を一緒にする前提として、暫くは世間體を兼ねて、お富は濱町の父親の許に留めるの

が穏當だらうといふことになり、迎ひに來た手代に連れられて、灯の入る頃、德之助は漸く横山町へ歸る氣になりました。

「お富、——若旦那はお店へ歸つたが、三百八十兩の金が戻らなきや、親類方や古い奉公人の手前、増屋の跡取りに直るのがむづかしい事は、お前にも判るだらうな」

改めて彦兵衞は、娘に因果を含めるのでした。

「——」

それは併し、何の前提やら父親の氣持を測り兼ねて、お富は美しい瞳を擧げました。

「増屋から追出されても、裏長屋に住んでも、二人一緒に暮せるから——とお前は思ふだらうが、それぢや世上の義理が濟まねえ」

「——」

「男の出世を妨げるのは、何と言つてもつれ添ふ女の恥だ。解るか、お富」

「え」

「それが解るなら、今晩ほんの暫く、厭な客に附き合つてくれ——三百八十兩の手土産を持つて來る客だ」

「お父さん、それは？」

「察しの通り巾着切りの東作といふ男だが、深いわけがあつて、表沙汰にしたくないのだよ。判るか、お富」

子供の時別れて、五年前母親の臨終の床で、久振りに逢つた父親ですが、それから五年の間の愛育は、世の常の五十年の恩にも超えて深いものでした。

世に斯んな良い父親があるといふことは子として、何といふ誇らしいことでせう。

お富は何時でも、半白の鬢から、後光が射すやうな心持で、父親彦兵衞を見て來たのです。

「お父さん、——私には何にも判らないけれど、お父さんが良いと思ふことならどんな事でもやつてみませう」

お富はそれほど父親を信頼し切つて居たのでした。經師屋東作、描き菊石と綽名のある大惡黨が、押掛け聟に來ることは元より知る由もありません。

間もなく、東作が町駕籠で乘込んで來ました。

「爺さん、酉刻だ、早過ぎはしないだらうね」

さすがに極りが惡かつたものか、少し面を冠つて、笑み割れた頬が、とろけて落ちさうなのも無氣味です。

「まア入んな、——お富、お富、俺の古馴染の東作さんだ。挨拶をするがいゝ」

狹い家、逃げも隱れもならぬお富は、行燈の蔭に小さくなりました。

「お富坊、相變らず美しいことだな。今晩から俺は此處の人だよ、お前とは——」

「シツ、餘計ことを言ふな。若い者は吃驚するぢやないか」

彦兵衞は精一杯の眼顏を働かせます。どうしても承知しなかつた東作を説き落して、お富との祝言は、いづれ德之助と縁が切れてから、改めて盃事をするとして、今晩はほんの見合だけ——といふ事で話をつけたのです。

「ヘツ、ヘツ、さう言つたものかいなアお富坊かう見えても、俺は日本一の親切者さ。お富坊に氣に入るやうに、三百八十兩の金はちやんと此處に持つて來たよ。次第によつちや熨斗をつけないも

のでもない――なアお富坊、今晩にもこの俺の女房になる氣はないかえ」

しな垂れかゝる四十男の醜さ、お富はゾツと寒氣がして、父親の背後に逃げ込みました。

「お富、――あれほど言つて置いたぢやないか、酌をして上げな」

「ハイ」

「なア、東作。夜は長げえ、先づ御輿を据ゑて飲むがいゝ、――そのうちにはお富も、一と晩經てば、一と晩だけ年を取るといふものだ」

「その代りお互ひも一と晩年を取るぜ、ヘツ〳〵。だが、全く堪らねえぜ、――お富坊の酌で飲むなんて、俺は三年越夢に見た圖だが、昨日までもこんな幸せにあり付かうとは思はなかつたよ」

「だからよ、存分に飲みな」

「介抱はお富坊に頼むか、ゲープ」

東作は鯨のやうに飲みました。逃げ腰のお富は、彦兵衞に眼で叱られて、觀念し切つた手に銚子を擧げるのです。これが德之助を救ふ方法と聞かされなかつたら、どんなに父親が引止めたところで、四半刻とも我慢をするお富ではなかつたでせう。

酉刻から亥刻まで、呑んで、呑んで、東作は到頭正體を失ひました。

「いゝ鹽梅に眠たやうだ。お富、枕を持つて來な、――それから、行燈を退かせるのだ」

「――」

默つて行燈を退かせ、杯盤をざつと片附けて、お富は部屋の隅に顫へて居ります。

「驚くことはない。少し靜かにしたら、よく落着くだらう」

「――」

「飛んだ獸に附合ひさせて、氣の毒だつたなア。お富、その代り、この跡始末は俺がしてやる」

彦兵衞は亂醉して、正體もなく眠りこけた東作の側に膝行寄りました。

「お父さん」

お富は思はず聲を出しました。父親の手が妙に物馴れた滑らかさで、何にも知らずに眠つてゐる、東件の懷中にスルスルと入つて行くではありませんか。

「拔かれた物を拔くまでのことだ。驚くことはない」

ズルズルと抽出したのは、蛙を呑んだ蛇のやうに、恐ろしく脹らんだ胴卷。

「ウ、ウン、ウ、ウ」

うなされた樣に、寢返りを打つ東作。

「――」

彦兵衞の右手には、キラリと匕首が光りました。

「お父さん」

「大丈夫だ、心配するな。こんな毒蟲は、人助けの爲に命を取つても仔細はないが、俺は卑怯な人殺しはしねえ」

「――」

「お前はその胴卷を持つて、橫山町の增屋へ行つてくれ、――此處にまご〳〵して居て、此野郎が眼を覺すと、後が面倒だ」

「お父さん」

「手觸りでもよく解る。中は確か三百八十兩。少し重いが、男一人

の命にも關はつた金だ、しつかり持つて行け」

胴巻を娘の帶の下へ廻し乍ら、彦兵衞はさう言ひ續けます。

もう子刻近いでせう。街は灰を撒いたやうに鎭まつて、朧月の精のやうに、ヒラヒラと飛んで來る花片。

「お父さん、それぢや」

お富は三百八十兩の小判を背負つて、一歩眞夜中の街へ踏出しました。

「命がけの金だぞ、お富」

「ハイ」

「これが暫くの別れにならうも知れない」

「お父さん」

「なアに、そんな事があるものか。明日は又逢はう、いゝか、お富」

六

娘を夜の冒險に送り出して、引返した彦兵衞。行燈の灯りの中に、動物のやうに亂醉した身體を横へた東作を、憎々しく見詰めましたが、いきなりハタと枕を蹴つて、

「野郎、起きろ」

低いが、壓し付けるやうな聲を浴びせました。

「ウ、ウ、ウ」

ゴロリと寢返りを打つた東作、それ位のことでは、なか〳〵目を覺しさうもありません。

「只の洒だと思つて、よくも食ひやがつたな、畜生ツ、何うするか見るがいゝ」

勝手から持出した手桶、井戸端へ行つて二た釣瓶まで汲み入れ、滿々と水を湛へたのを持つて、東作の枕元に突つ立ちました。

「水垢離を使はせてやる、驚くな」

高々と持ち上げた手桶から、ドツと一條の飛瀑、熟睡した東作の眼へ鼻へ口へ、いや、顏も襟も胸も、上半身一ぱいにブチまけたのです。

「ワツ、な、何をしやがる」

ガバと飛起きた東作。

「騷ぐな、家は借家だ。望みとあらば、もう二三杯食はせてやらうか」

手桶を振り冠つたまゝ、彦兵衞の啖呵は虹を掛けます。

「や、や、胴巻を抜きやがつたな」

立ち上がつて自分の懷中を搜つた東作、さすがに酒の醉も覺めました。

「當り前よ、油斷をした懷中から抜くのは巾着切の手柄だ。ざまア見やがれ」

「爺奴、一杯食はせたな」

濡れ腐つた袷をかなぐり捨てると、逞ましい素つ赤裸、東作は行燈を小楯に屹と身構へます。

「金を抜いて娘をくれと拔かしやがつたな。手前は江戸の巾着切の面汚しだ。辯天樣のやうな娘を、そんなモモンガアの餌にしてたまるものか。少しは目が覺めたか、馬鹿野郎ツ」

「その娘をヌケヌケと增屋の嫁にする氣だらうが、そんな甘いわけに行くものか」

「俺の方でも、手前を錢形の親分に引渡す筈だが、——昔の誼、繩

を打たせちや氣の毒だ」

「何を、老ぼれ」

「何方も抜き差しならねえ破目だ。仲間の仕來りは、こんな時には二梃の匕首に物を言はせる外はねえ」

「何？」

「さア、そいつを持つて柳原の土堤まで來い。地獄の旅へ、何處が先に踏出すか」

ガラリと投げた匕首、行燈の影から手を出して、東作はあわてて一梃を拾ひました。

「しやら臭え、來いツ、爺奴」

二人は毬の如く、朧月の街に飛び出したのです。

× × ×

それから一と月、江戸は青葉の風薫る頃となりました。三百八十兩を取り返したのは、彦兵衞お富の親娘の手柄と判つて、徳之助の家督相續にも、お富との祝言にも、今は文句を言ふ人もありません。

左官の彦兵衞は假親を立てて貰ふやうに、強つて主張しました。

——萬一自分の素姓が知れた時の用心だつたのでせう。增屋の主人は、それを世間並の遠慮と思ひ込んで、反對し續けて來ましたが、最後には折れて出て、一應增屋の親戚の養女と披露し、それから改めて正式の輿入れになりました。

今日はいよ〳〵徳之助とお富の祝言といふ日。

濱町の貧しい父親の許に、暇乞に來たお富は、近所の人達に包圍されて、暫くは、祝ひの言葉と、羨望の感動詞と、あらゆる目出度いものの渦の中にもみ拔かれました。

「まア、何て綺麗でせう」

「お富さんは本當に仕合せねえ」

「時々は濱町へもいらつしやいな」

そんな言葉の中に、盛裝したお富と、相變らぬ布子一枚の彦兵衞は、唯おろ〳〵するばかりでした。

「それぢや、お父さん」

やがて傾く陽、お富は盡きぬ名殘を惜しみ乍ら、店から廻された駕籠の中に納まりました。

「お富、達者で暮せよ」

戸口まで送つて出た彦兵衞の眼には、涙が光つて居ります。

「お父さん、時々は横山町へ來て下さるでせうね」

お富は美しい髪を氣にし乍ら、駕籠の中から顔を出して、咲き立ての花のやうに、四方の空氣を匂はせます。

「行くよ、行くには行くがな、——親父が娘の嫁入先へ、ウロウロ行くのは、あまり見つともいいものぢやねえ」

「でも、お父さん」

「心配するな、時々はお前も顔を見せてくれ。言ふまでもねえ事だが、夫を大事に、御主人や御隱居によく仕へるのだよ」

「ハイ」

「やれ〳〵、これで俺も安心だ。死んだおつ母アも、さぞ喜んでゐるだらう」

「お父さん」

駕籠は上がりました。親と娘を隔てる、町の女房、娘達、美しく華やかな夕陽の中に、あやかりものの駕籠を、何處までも追ひます。

それを立ち盡して見送る彦兵衞。

「——」

默つて半白の頭を振りました。涙はポロポロと、赤銅色の頬を傳はつて、土間の土くれを濡らします。

そつと肩に手を置く者。振返ると。

「彦兵衛」

錢形平次が立つて居るではありませんか。

「親分」

「お慈悲は過ぎたぞ、——此上のお目こぼしは、役人方の落度になる」

「覺悟は出來て居ります、親分」

彦兵衛は靜かに後ろへ手を廻しました。

「經師屋東作殺しの下手人、神妙にせい」

「親分、有難うございました。お蔭で娘は、何にも知らずに、あの通り——」

街の夕陽の中に薄れて行く駕籠、それを見送つて、彦兵衛は聲もなく泣くのです。

「笹野樣の御慈悲だ——それもこれも。さア立て。」

「親分、この彦兵衛が最後の願ひ、もう一つだけ無理を聞いて下さい」

「——」

「お願ひだ、親分。あの娘には、何にも知らせたくはありません。私の居ないのを不思議に思つたら、亡妻の菩提を弔ふため、西國巡禮に出た——とさう言つて置いて下さい」

彦兵衛は自分の襟に深々と顔を埋めます。

「いゝとも、この一埒は笹野樣も御奉行樣も御存じだ。東作はお上でも持て餘した惡黨、それを害めたところで、大したおとがめはあるめえ——お富に初孫が出來るまでには、手前も西國巡禮の旅から歸つて來られるだらうよ」

「親分、何にも言はねえ」

彦兵衛は崩折れました。合せた手が顎の下に、涙に濡れてワナワナと顫へます。

「八、見つともねえ、そんなものを引込めろ」

「ヘエ——」

後ろから來た八五郎は、あわてて捕繩を引込めました。どつと起る街の歡聲、花嫁の駕籠を見付けた、子供達の聲でせう。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第十六巻　笑ひ茸」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年9月28日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　　1938（昭和13）年増刊号
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2014年1月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

巾着切の娘

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/